

思いついたネタを投稿していただくだけ

コンコン狐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

コレとコレ、合わせたら面白いだろうなあ…… と思った物や、よくあるネタだったり。とにかく、一話で区切るような感じで。

リクエストがあれば頑張って連載又は短編で出すかも。

目次

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s 特殊時空犯罪対策部隊

ステラと叫びたい	1
執事	32

魔法少女リリカルなのは Strikers 特殊時 空犯罪対策部隊

一向に減少の兆しを見せ無い犯罪。その犯罪も今や多様性を持ち、さらに悪質で巧妙なものへ変わっていつている。また、捕える側の質の低下や人数の減少により、検挙率が低下していった。その状況を打破すべく時空管理局は新たに部隊を新設した。

その名も『特殊時空犯罪対策部隊』。

今日はその部隊がついに発足の日となる……のだが。

その対策室の前で立ち止まっている一人の男性。暗い夜に溶け込むような黒い髪。それに合わせるように黒縁の眼鏡を掛けている。彼もその部隊のメンバーの一人だった。集合時間はまだ五分ほど時間がある。

しかし、五分前行動など当たり前であり、何よりこの部隊を仕切る立場にある彼がこの時間に来るのはある意味妥当なことだ。

何が言いたいのかというところ、この扉の先で待機しているであろうメンバーが全員揃っていることが当たり前だということ。

「はあ……」

しかし、彼から滲み出る諦めの念だった。まるで、あるスポーツでとてつもない大差をつけられて、巻き返すどころか、戦意を喪失した負けチームのプレイヤーのように。

実際、『特殊時空犯罪部隊』など名ばかりな部隊で、いわば各部隊から不要と言われた厄介者を集めて置いておこう、といった理由で作られたようなものだった。

故に、彼はメンバーが全員揃っているだろうか不安で仕方なかった。しかし、一つ言えるのがメンバー全員が自分の長所における分野に関して右に出る者がいない、と言わしめるほどの『精鋭』だとい

うこと。

ただ、ほんのちよつと個性的な人物なだけで。

だからこそ、厄介者だと言われ、不要だと思われ、ここに追い出された者達だとしても。いくらなんでも揃っているだろうと期待を込めながら扉に手を掛け押した。

「——おはよう！」
.....

しかし、開いた扉の先は真新しい執務机と椅子、新設されてから誰も入った形跡が無いと思えるような籠った空気が満たされている対策室だった。

「.....マジかよ」

思わず、そう呟いてしまうほど予想が当たったのだった。残念に思いなながらも彼は隊長が使う机へ近付き荷物を置いて自分も椅子に深く座った。

「あの.....」

まさか揃うどころか一人もいないとは思ってもいなかった。彼が部隊長をするのは初めてでは無いが、こういった状況になるのは初めてのことで、このまま来なかつたらどうしようか。

どうしたら一番得策なのか今までやってきた人生の知識をフルに使って考えた。

「あ、あのー.....？」

しかし、まだ来ないと決めつけるのは良くない。もしかしたらやむを得ない事情があり遅れている可能性だってある。

そろそろ集合時間になるが十分ぐらい待ってもいいだろう、と彼は考えを簡潔させ待つことにした。

「あ、あのー！」

「うおっ!?!」

いきなり耳元で大きな声を出され驚きのあまり仰け反ってしまい、見事に椅子ごと後ろにひっくり返った。カラカラと椅子のローラーが空回りする音が響く。

とても間抜けな構図だった。

「あ、すみません！ すみません！ 僕、影薄くて！ あの、その…… サ、サイモン・ウォーカーです！ 階級は二等陸曹です!! 術式は——」

「いや、こんな状態で自己紹介しないでくれる？」

サイモンと名乗った彼女はまた謝りながら自分の隊長となる彼を起こす手伝いをしたのだった。

体制を立て直し、もう一度、ちゃんとした構図で自己紹介をしてもらう。

隊長である彼が椅子に座り、手元にあるメンバーの情報が記載されている資料を開き見る。改めて机を挟んで正面に立っているサイモンを見た。

まつ毛を通り越して目下ぐらいまで前髪を伸ばしており、目元が良く見えない。さらにオドオドしているのも合っただけか全体的に頼りないのと暗い印象を受ける。取り敢えず手元の資料の情報通りの子だった。

「サイモン・ウォーカー。ランクはA……なるほど、その影の薄さは元々？」

「は、はい。恥ずかしながら昔から影が薄くて……隊長が入ってきたとき挨拶を返したんですが……」

「それに関しては悪い……ただ、もう少し声量上げれる？」

何とか聴こえたものの、サイモンは余り人と面と向かって話すのが得意では無いのか、段々と声が小さくなっていき、最後は聞き取れないほどになる。

そして、サイモンは怒られたと勘違いしたのか頭を下げて何度も「すみません！ すみません！」と言う。謝るときは大きい声なのに……。

そんなやりとりをしていると対策室の扉が開かれ鋭い目つきに、佇まいから分かる凜とした女性が一つのダンボールを前に抱えて入ってきた。

「おつ、来たな。遅刻だが何かあったのか？」

隊長である彼がそう声掛けるとダンボールを自分の入口から近い机に置き、肩まで伸びたブロンドの髪を後ろで結ってから彼の前に立ち敬礼をした。

その時、サイモンが立っていたのに気が付かなかったのか、彼女はサイモンを弾き飛ばした。弾かれたサイモンだったが彼女に至っては気が付いていなかった。

「ルミナス・サトライザー。陸曹長。遅刻したのは寝坊したから」

「おいおい、その前にウォーカーに謝ったら……ん？」

それだけ言って彼女は先ほどの机に戻り、持ってきた机の横幅に近いぐらい大きなダンボールから一つのふかふかな枕を取り出すと、それを机に置き頭を沈めた。

「待って、ちよつと待って。え？ ウソでしょ？」

手元にある資料を急いで捲りある人物を見る。まさか彼女が一番懸念していた人物だと思っていなかった。

あの佇まいや目つき、如何にも噛みついて来そうな気の強い方だと思っていたが、まさか彼女がその問題児だったとは。

この資料曰く、朝起きられない、昼寝をしないとダメ、夜は八時には寝ないと気が済まない。何故、この資料には顔写真が載っていないのか心底疑問に思った。

「いや、あのなサト——寝るの早いな、お前!？」

直ぐに寝息が聞こえてきた。赤ちゃんもビックリなほどの寝付きが良い子であった。だからそんなに発育がいいのだろうか……何処が、と言わないが。

「……すまんがウォーカー叩き起こしてやって……ウォーカー？」

しかし、名前を呼んでも返事が無い。また、声が小さいのかと思っただが、まず前方百八十度にはいない。

あれ？ と首を傾げながら机から乗り出して右を見れば、壁に身体を預け脱力しきっているサイモンの姿がいる。

「どうした、ウォーカー？ ……返事をしろ、ウォーカー!!」

側まで駆け寄って肩を揺らす反応が無い。顔を上げさせ頬を軽く叩く。やはり、反応が無い。まさかとは思うが先ほどルミナスに吹き飛ばされて――。

「いやお前、打たれ弱すぎるだろっ!!」

確かにサイモンの魔導師としての特性上、打たれ弱いと資料には記述されていたがこれほどとは思っていなかった。

いや、ルミナスの人間離れた身体的強さがあるのも関係しているかも知れないが、いくら何でもぶつかっただけで気を失う奴がいるのか。

彼はただただ冷静に分析をするという現実逃避をし始めた頃、彼の耳に扉を開ける音が聞こえて来た。

扉の方を見てみれば瓜二つの二人の少女。ピンクの髪を揺らしながら右のサイドテールをしている少女が一步前に出て言う。

「――跪きなさい、下僕」

「は?」

入ってきていきなりそんなことを言われても困惑するだけである。それが分かったのか慌てて、もう一人の少女、こっちは左にサイドテールをしている子が先ほど言った子に困ったように言う。

「姉さん、そんなんじゃないやダメですよ! 多分、あの方は隊長さんだと思うの。それにいきなり言ったから困っていますよ? だからここは――そこにお座りになって、子犬さんだと思おうの」

「いや、意味変わってねえから!!?」

寧ろ、人から犬にランクが下がってしまったている。

「あら、本当だわ。でも、フフツ、犬みたいに吠えちゃって。その姿勢悪く無いわ。だから、名乗ってあげる。ありがたく聞きなさい。マナ・エリザベートよ」

「妹のカナ・エリザベートです。よろしくお願いします、子犬さん」

この時ほど、彼がやる気といか、自信というか、とにかく彼の中にある情という全ての感情を損失しかけたことは無いという。

このカオスな状態が初めて対策室メンバー全員の顔合わせになった。

不安で仕方無いがサイモンの意識を戻して、ルミナスも何とか起こして、傲慢な双子も席に座らせて、やっと落ち着くまで十分も時間を有した。

一度、掛けていた眼鏡のレンズを拭き、一旦気持ちするりセットさせて、メンバー全員が見える位置に立つ。

「えー、今日からこの部隊を預かることになったシリウス・エドモンドだ。階級は――寝るな、サトラライザー。そんなに長くしないから。えーっと、階級は三等陸佐だ。お前たちのことは――おい、その双子、話を聞け。キャツキャツ、ウフフじゃねえだよ……んんっ！お前たちのことは良く聞いている。性格や集団行動に難があるのはよく分かったが、まあ、この部隊の主な仕事はお前たち向きな物になるだろう。そして――」

「――ランチの時間ね。行くわよ、カナ」

「まあ、もうこんな時間。では、行ってきますね」

「……お前等」

この部隊の隊長であり彼女たちの上司にあたるシリウスの話を途中でぶった切り、さらには朝食を食べにいかうとする双子について堪忍袋の緒がキレたシリウスは去って行こうとする双子の頭を鷲掴みにして持ち上げた。

「いだったっ!! な、なにすんのよ!!?」

「か、髪の毛のセットが崩れてしまいますう!?!」

軽く締め上げてから手を離すシリウス。解放された双子は一旦距離を取り今にも反撃しよう構えた。

……が、シリウスは何故か微笑ましい笑みを浮かべており、その様子に思わず戸惑う二人。その表情は決して怒っているようには見えない。

寧ろ、笑っている。しかし、何故か恐怖を感じた。

「お前等が人を嘗めていることがよおーっつく分かった。これは一度ちゃんと分かせた方がいいな。表出ろ」

表情とは裏腹にドスの聞いた声で親指を後ろに指す。それを聞いていたサイモンは咄嗟に巻き込まれないように声を出そうとしたが。「えっ、あの、僕そんなことは——」

「——へえ、良く言ったものじゃない。ちよūdいいわ、最強つていうのがどれほどなのか…… 見せてもらいましょう」

「この痛み、十倍にして返しますよ？」

サイモンの声は虚しくシリウスには届かなかつた。何とも可哀想な子である。

しかし、サイモンはどうなるか想像できてしまったので何とか自分だけでも逃れようと、今度は服を引っ張るなど絶対に気が付いて貰えるように手を伸ばすが、シリウスは分かつてかのようにそれを避け、サイモンの手は空をきる。運も無い子である。

そして、シリウスは視線を未だ寝ているルミナスに向けて言い放つた。

「つてことだ。聞いてるんだろ？ サトライザー」

するとルミナスは枕に埋めていた上半身を持ち上げた。

「…… 気づいてたんだ」

「自己紹介してるときは寝てたが、俺が動いてから呼吸が変わつた。その時からお前、少なくとも話は聞いてただろ？」

その説明を聞いてルミナスは眠たそうな目を開き、来たときのよう
に鋭い目つきに変わった。

「私、弱い人には従わないから、それでもいいならやってもいい」

前の所属でもなまじ実力が高いためその時の上司でさえ手を付けられず、それから段々と従わなくなつた。

その事情も知っているシリウスはちよūdいと思つていた。実際それが狙いの一つではあるが、思つていた以上に嘗められていたことを理解し完全にキレてもいた。

もしここに何年も一緒に仕事をしたことがある同僚がいたら目を疑うだろう。

それほど、シリウスがキレることなど滅多にないことだつた。

「訓練所…… はマズイか。第八なら…… ああ、でも今試験中

だっけな。まあ、行く時には終わるか、結構広いし問題無いだろう。よし、お前等着いて来い」

「カナ、後悔させてやるわよ」

「勿論です、姉さん！」

「じゃ、じゃあ、僕はここで待機して——うっ？ あ、あのサトライザーさん？　なんで僕の腕掴んで……ひっ!?　は、離して下さい!？」

「……」

何年かぶりにキレたシリウスと、一人を除いてその後ろに今にも飛びかかろうとしている各部隊で問題視された厄介者たち。

その姿を見た管理局員たちが変な憶測をし始め、管理局中に噂が瞬く間に広まっていった。

§

臨海第八空港近隣　廃棄都市街

スバルとティアナの試験が終わった直後。はやてにメッセージが入って来た。今時、簡単に通信で出来て、通信した方が手っ取り早いのにはメッセージを送る人物など知り合いに数えるほどしかない。

珍しく思いながら開き、内容に首を傾げた。

「え？　これホンマ？」

「？　どうしたの、はやて」

素っ頓狂な声で驚きを上げたはやてにフェイトが声をかける。

「いや、今からここ使うんやって」

「ここを？　そんなこと聞いてないけど……急な話だね」

内容を簡潔に言えば、戦闘訓練をするからここを使う、ということだった。内容自体そんな珍しいことではない。

しかし、ここ廃棄都市で戦闘訓練をするということは実戦さながらの訓練をするということだろう。

一体、誰が？ そう思つてフェイトとはやては二人揃つて差出人を見る。

『シリウス・エドモンド三等陸佐』

「——えっ」

はやてもフェイトも顔を見合わせて急いで下にいるのはと二人を回収しに行った。

「急いで、急いで！ はよせな、巻き込まれる!!」

「ちよ、ちよつと。え?」

困惑するなのはを無理やりヘリの中に入れ込み、治療の途中のティアナも急いで回収した。

色々とありすぎてぽかーんとしているスバルとティアナ。そして、その二人を見て笑みを溢したのが二人に問う。

「えつと……二人ともどうしたの?」

しかし、明らかに二人の纏う気配がが戦闘時そのもので、なのはも何か急を有することの事件でも起こったのかと思ひを引き締めた。

「今からここをシリウスさんが使うんやつて」

その『シリウス』という名詞を聞いただけで、なのはは全てを察した。

「ああ…… そうなんだ。うん、二人がそんなに身構えている理由が分かつたよ」

三人は顔を合わせ苦笑いをした。イマイチ状況を理解出来てない二人にリンフォースが説明した。

「シリウス・エドモンド三等陸佐。近接戦闘において右に出るものはない、と言われてる人でね。まっ、詳しくは省くけど、少し前にはやてちゃんたちがお世話になった人なんだよ」

しかし、その説明を受けてもスバルとティアナの二人はぴんつと来ず、首を傾げているだけだった。

「鬼のエドモンドつて言つたら分かるんじゃない?」

「…… あっ」

フエイトが言った聞き慣れた呼び名に顔を合わせて声を出す二人。彼女ら、いや、管理局の殆どが知っている生きる伝説の鬼教官。二人は関わりを持つことは無かったが、人伝に色々聞いていたことを思い出した。

親しみやすく、基本的優しい人らしいが、戦闘訓練、それも近接戦闘に関しては正に地獄と称されるほど容赦しないらしい。

そして、その訓練を受けたものは大体、近接戦闘しかやらなくなるとか。そのことを思い出し目の前にいる憧れの人に恐る恐る聞いた。

「あ、あの、もしかして皆さんも？」

スバルの質問に三人は首を横に振った。

「ううん、訓練は受けてないけど仕事とかでお世話になっただけだよ」

なのはの返答にスバルは思った。

なら、何故三人はああも急いで退避して今すぐにでも対応できるようにしているのだろうか。スバルとティアナは言い難い不安に包まれた。

「そうだ。折角だし見学していけばええやろ。二人にもいい経験になるやろうし」

はやてがプログラムを操作し、機内に全員が見えるホログラムが現れシリウスたちと思われる団体を補足した。

「一応、シリウスさんに聞いて方がいいんじゃない？」

「あー…… そうだね。私からするよ」

フエイトの提案になのはが応答した。シリウスの方も分かっているだろうが、やはり階級はあちらが上。いくら親しい仲とは言え、礼儀というのは大事である。

直ぐに通信が繋がり機内にシリウスの声が響く。

「あ、シリウスさん。お疲れ様です」

『ああ、お疲れさん。悪いな試験が終わったばっかりなのに』

「いえいえ、大丈夫ですよ。それで今後のためにもシリウスさんの訓練を見学したいんですが…… いいですか？」

『見学？ 見学か…… 見学？』

何やらシリウスの返事がおかしいが、やはり不味いのだろうか。言

葉は上手く拾えてないが何やら後ろの方で声が聞こえてきている。そして、やっと言葉を飲み込むことが出来たのかシリウスの返事が返ってくる。

『あー、まあ、構わんが…… そんなにいい物じゃないぞ。一方的に**煽る**ような感じだろうし』

「えっ」

その言葉に思わず体が固まる。あのシリウスからそんな単語が出て来るなんて思っても居なかったのは数秒間言葉を失い、再起動をしてからどういふことか聞こうとした時にはもう切られていた。

なのは達は訓練を受けてはいないが、見学するだけなら何度も見たことはある。地獄だと評されるぐらいのキツさはあるが、決して弄ぶようなことはせず一人一人丁寧に実践的に教えるのだ。

だからこそ、その訓練を途中で投げ出すような生徒は一人いない。何故なら、もう次の訓練で実感できるからだ。

自分が強くなっているのが。

それに、訓練外では本当に部下思いというか、人に優しくすぎるような、まさに善人を体現したような人間なのだ。

その自分達にとって理想に人であり、憧れの人でもある人が、久しぶりに話したら別人のように思えてしまうほどシリウスの言葉はシヨックがデカかった。

その状態のなのはとシリウスの後ろに着いて行っている四名を見てはやては思い出したように語る。

「そういえば、この間シリウスさんと食べに行ったとき——」

「——ちよつと、ソレどういうこと?」

凄まじい速さで反応したのはとフェイトに思わずはやては苦い顔をする。それはしまったということなのか、それとも、また別の意味があるのか。

「ま、待って。取り合えず後で話すから聞いて欲しいやけど——だから、少しずつ距離詰めて来るのやめて」

真顔で距離を詰めて来るほど怖いものはそう無いと思う。それを実感したはやては一度なのは達を落ち着かせてから話始めた。

「それでその時に聞いた話なんやけどな。何でもシリウスさん部隊を持つことになったらしいんよ。それが彼女達とは思わなかったけどなあ……。シリウスさんが怒るのも分かる気がする」

はやてが機内に映し出された映像を見る。そこには、はやてが言う四人が今にも戦闘が始めようとしていた。

シリウスを除く四人はバリアジャケットに身を包んでおり、後はシリウスが準備を終えれば始まると言った状態だった。

しかし、肝心のシリウスは制服を上だけ脱ぎ、シャツを捲り上げてネクタイを緩めただけでバリアジャケットを展開しようとしなかった。

それを見ていたスバルとティアナは疑問に思う。しかし、なのは達は何も思っていないのか普通にしていた。

それは、対峙している四人も分かっているように普通にしている。少し話してシリウスはそのまま剣型のデバイスを構えた。対する四人は同じように各々のデバイスを構える。

その中でシリウスと同じの近代ベルカ式を使うルミナスが前線に立ちデバイスを構えた。双子は大きく距離を取りこちらも構える。そして、サイモンは。

「え？ もう一人は？」

そうティアナが声を上げスバルも気が付く。目を離れた覚えは無いはずなのに四人の内一人——サイモンがもう既に姿を消していた。

それは、なのはとフェイトも少し不思議そうにした。その皆を見てかはやては手にあるファイルを開いた。

何故、彼女がメンバーの資料を持っているかは不思議と誰も疑問に思わなかった。

「サイモン・ウォーカー。諜報や追跡、後は潜入なんかの特化した異色の魔導師。ある組織に潜入してボスだけひっ捕らえてきたこともあ

るぐらい、高い隠密性を持つ魔導師やね」

確かに他にも潜入など得意とする魔導師はいっぱいいるだろう。しかし、サイモンは他の魔導師とは大きく異なるものがある。

それは例え認識していたとしても、意識して見ていたとしても、ちよつとした空白の時間で姿が分からなくなる。

目の前にいたはずなのに一瞬にして消えるなどもはや人の意識から外れて動けるのと同じことだ。実際、サイモンがしたのはミスディレクションを応用して魔法を発動させたのに過ぎない。ただ、タイミングと魔法の練度と発動速度が桁違いなだけ。

「近代ベルカを使ってるのは…… ああ、シグナムが言ってた人やね。ルミナス・サトラライザー。シグナムがちゃんとした人が鍛えれば負けるかも知れない、って言ってたのを覚えてる。天才肌ってヤツやね。ちよつとすれば何でも覚えるし、その使い手以上に使いきれてしまふとか」

ルミナスにとって一度見た動きや自分に合っている魔法であれば基本的に出来てしまう。それは相手のクセや動きすらも読める域に達しており、長引けば長引くほど後手に回るだろう。

「この双子も良く聞いたことがある。姉のmana・エリザベート。家は代々由緒ある貴族で、魔導師としての才が高い。こっちも天才ってヤツやね。ほぼ独学で魔法を学んでオリジナルまで生み出してるほどや。ハッカーとしての能力が高い？ まあ、機械いじりも得意ってことやね」

が、manaにとってそれは機械だけに留まらず人間に対してにも可能にした。主に視覚や聴覚、平衡感覚など五感をいじることが出来る。manaならばちゃんとした設備さえ整えれば人の脳すら覗けるほどに。彼女もまた異色な魔導師だった。

「最後はカナ・エリザベート。こっちはどちらかという秀才や。ウチも一度だけ見た事あるけど彼女の射撃能力はありえんと思ったほどなんよ。ほぼ避けるのは無理。百発百中で狙撃に特化した魔導師やね」

カナにとって障害物など無いも同然。さらに、貫通や拡散など直ぐ

に使い分けが出来るため余程の事が無い限り確実に仕留めることが出来るだろう。

「ひゃー、能力だけ考えれば精鋭中の精鋭しかおらん部隊やん」

「確かに能力はスゴイけど……余りチームワークとか考えてなさそうな人達だったよね」

なのはサイモン以外は会ったことがあるので、正直いつてはやての言う通り能力だけ考えれば過剰戦力だろう。

しかし、これが部隊としてチームとして動くとなると性格上、お互いが足を引っ張り合いそこの部隊より使い物にならないと想像できってしまう。

だが、スバルやティアナにとってそれだけ聞いたら対峙しているシリウスが可哀想に思えてる。

チームワークなんてもの無しに考えてもそれほど魔導師たち相手に一人で闘うなど正気の沙汰じゃない。

「これって大丈夫なんですか？　いくら近接では最強を誇るエドモンド教官とはいえ……」

だが、三人は少し困ったように笑みを表情に浮かべていた。

「正直言っただね。シリウスさんはそれ以上に精鋭化物なんだ」

なのはの言葉に二人はまた自分の耳を疑った。しかし、それが本当だと分かったのは直ぐのことだった。

§

軽装になったシリウスは自分の眼鏡を外し制服と一緒に用意していた収納ボックスが付いたロボットに渡した。そのロボットは真上に飛んでいくと安全高度まで避難して止まった。

「さてと……準備はいいな？　こっちは何時でもいいぞ」

眼鏡を外してからずっと閉じていた目を開いた。その行動を見ていた、否、それがどういいう事なのか知っていた四人は思わず言葉を漏

らす。

「「それは、大人げない」」

「……………くつ、お、お前らが悪いんだからな!? 俺を本気にさせたお前らがっ!」

何とも小物臭いセリフにも聞こえてしまうが、実際彼女たちからすれば正直ソレを使うのは大人げないと思ってしまう。

正直、ソレを使うシリウスに文句を言いたくなる。それほどシリウスが使おうとしている能力がどれほど強力なものか知っていた。サイモンに至ってはわざわざ魔法を解除して手を上げるほど。

——故に。

「だからって希少技能レアスキル使うのはどうかと思う」

「そうよ! そんなの使われたら勝ち目無いじゃない!!」

「姉さんの言う通りですよ! 戦闘にすらならないじゃないですか!?!」

「僕のアドバンテージも通用しないんじゃない? もう降参するしかないです」

「そ、そこまで言うかよ……………」

シリウス自身も自分の力を理解しているが、まさかここまでブーイングを受けるとは思っていなかった。

「分かった、分かったから……………じゃあ、片目だけで相手してやる」
シリウスにとって彼が最大の譲歩だが、相対する彼女達は悩む。実際、シリウスほどの使い手であれば目をつぶっても戦えるだろう。しかし、彼女ら程の実力者となると難しい話になってくる。

それは、彼女達も理解しており、管理局の頂点に立っているかも知れないシリウスに一応実力を認めて貰えていることは素直に嬉しいと思っていた。ただ、それとプライドは別である。

しばらく悩み、そして四人で話した結果。

「片目ならいい。少し不満だけど」

「お前等、実際仲いいだろ」

四人が囲って話している姿を見てるととても昔馴染みのようにも見える。

「それはそうよ」

「同期だから」

「マジかよ……聞いてねえよ」

どうやら、その中でもルミナスとマナは特に仲が良さそうにも見える。ちゃんと資料には目を通したはずなのだが……結構見落としていたかも知れない。

いや、あの資料は如何せん欠けている所が多い。作ったヤツが悪い。そうに違いない。

「ゲンヤさんめエ……はあ、なら連携は取れるんだな？」

「当たり前よ……と、言いたいところだけど久しぶりだし、皆それぞれどう動くか把握しきれてないのよね」

「なるほど……まあ、取り敢えず打ち込んで来い。話はそれからだ」

シリウスとしてはただ叩きのめすだけでは無く、このメンバーでどのくらい連携が取れるかどうか知るのも一つの考えとしてあったが、どうやらそれは大丈夫そうである。

お互いが個性的すぎて連携の「れ」の字も出来ないと腹を括っていたが、いい誤算であった。後は一人一人の動きを見れば初日としてはまずまずの成果だろう。

四人がそれぞれ定位置に付く。シリウスも左目を閉じた。

「来いー！」

シリウスがそう発破を掛ければルミナスが一直線にシリウスに斬りかかった。

「う、うそでしょ……？」

信じられないものを見たスバルとティアナはホログラムから眼を離せないでいた。戦闘が始まってから終始シリウスに一撃を入れることは出来なかった。

決して彼女達が弱いわけでも、連携が出来ていなかったわけでもない。スバルたちから見たら見事と思える連携だった。

しかし、目の前で起きている現実には信じられないものだった。

「これがシリウス・エドモンド。なのはちゃんが管理局のエースならシリウスさんは切り札^{ジョーカー}。本気になったシリウスさんとやるなら家等^{うちら}となのはちゃん、フェイトちゃんもやね。多勢に無勢で押し切らんないかん」

はやてがここまで言うほど強すぎる魔導師。だから管理局最強だと言われている人。スバルとティアナはその姿に強い憧れと畏敬の念を抱いた。

「動きから魔法、その全てがウチらより無駄が無い。しかも、最強と言わしめているのがシリウスさんの希少技能^{レアスキル}——『未来視』」

シリウスの右目は自分の思い描いた未来を映し、左目はその未来にどうすれば至れるかという過程を映し出す。

多岐にわたる未来を限定しそこから確実な物を選ぶことが出来る、正に最強と言える能力。

無論、その一番理想的な未来を引き出すために実力も必要だ。絶対に勝てない相手に未来視を使っても自分が負けるビジョンしか映らないのである。

「いい物が見れたやろ。今後の参考にもなった時間やったね」

「うん……じゃあ、帰ってさっきの話詳しく聞かせてね？」

「あ、はい」

想いを寄せている、というわけでは無いと思うが……それ以前になのは達はシリウスとはやてが食事をしたことが気に食わないのかも知れない。

そんな中、ティアナは手を挙げた。

「あの、エドモンド教官は未来が見えるんですよね？　なら、何で巻き込まれるんですか？」

ティアナはずっと疑問に思っていた。最初はなののように広範囲に強力な魔法を使うような人かと思ったが、実際の戦闘を見れば近接だけで広範囲に攻撃が来るわけでもない。

未来が見えるのだから巻き込むかも知れないと分かるはずだろうに。

『何も全てが見えてる訳じゃないんだよ。見えてない……つまり、視界に捉えてないと未来は見えないんだ』

「あつ!?　え、エドモンド教官!？」

ティアナの問いに答えたのはまさかの本人だった。なのはがちょうど掛かってきた通信を受信したと同時にティアナの質問が飛んできた。

それを聞いていたシリウスは軽くジョギングした後のように気軽に答えた。

『相手を行動を先に読んで動くこともあるから、もし周りに誰かいたら気が付かないで巻き込む可能性があるからな……まあ、あんまり気にしたことが無いけど』

そう、シリウスもその希少技能特有のせい^{レアスキル}か、周りのことを気にせず目の前の敵に集中する。

そのため何度も隊列を乱すようなことがあった。ある意味、これもシリウスがこの厄介者たちの指揮を任された理由の一つだろう。

『悪かったな、試験の邪魔して。それじゃあ、頑張れよ——ナカジマ二等兵、ランスター二等兵』

「——ツツ！　ハイツ!!」

あれから、表向きに反抗することは無くなった。

そして、機動六課が本格的に動き出し、この特殊対策部隊も動く……はずだったのだが。

「Z z z……」

「カナ、そこはもう少しふんわりさせた方が可愛いわよ」

「そうですね、ならこっちは流すような感じに……うん、いいと思いますわ！」

「こ、こんな女らしい髪形なんて、は、恥ずかしいです」

「……お前等」

働かない、否、仕事が全く来なかった。

特殊な事件を扱う上に形式上の部隊。これがジュエルシードとかであれば動けるのだが、既にその対策としての機動六課が存在している。

つまり、余程のことが無いと動かない部隊だった。いくら仕事が無いとはいえ、だらけすぎで書類も終わらせてない部下達に一喝しようかと息を吸ったとき、シリウスのデスクに置いてある通信機から電子音に対策室に鳴り響いた。

「こちら特殊対策室……はい、了解しました」

通信を切り、手を叩きながらメンバーに声を掛けるシリウス。

「お前ら、喜べ。待ちにまつた——」

——事件だ」

おまけ

隊長 シリウス・エドモンド

出身： ミッドチルダ西部
所属： 時空管理局
階級： 二等空尉
役職： 執務官、 特別捜査官
コールサイン： B O S S
魔法術式： 近代ベルカ式・空陸戦AAA+ランク
ポジション： フロントアタッカー
陸戦魔導師から空戦魔導師

隊員 サイモン・ウオーカー
出身： ミッドチルダ
所属： 時空管理局
階級： 空曹長
役職： 捜査官

コールサイン： S U P K (スプーク)
魔法術式： ミッドチルダ式・空戦Aランク
ポジション： ガードウイング
シリウスと同じく陸上部隊から来た。幻術や捕縛、補助などの魔法はを得意とし、諜報や追跡調査に適している。

隊員 ルミナス・サトライザー
出身： ミッドチルダ
所属： 時空管理局
階級： 二等空曹
役職： 捜査官
コールサイン： F E L S (フェルス)
魔法術式： 近代ベルカ式・空陸戦AAランク
ポジション： フロントアタッカー
何事も真面目で融通が効かず、何事も多く語らず、兎に角、お堅い人間。

隊員 マナ・エリザベート

出身： ミッドチルダ

所属： 時空管理局

階級： 二等空曹

役職： 捜査官

コールサイン： ORCK (オルカ)

魔法術式： ミッドチルダ式・空戦Sランク

ポジション： フルバック

持ち前の処理能力を駆使し、部内で索適やマッピング、情報支援を行うエンジニア。デバイスも彼女が整備できる。妹と仲がいい。

裕福な家庭に育ち、お嬢様であり、そして才能に溢れた才女で持ち上げられていたため、妹以外心を開かず、傲慢。大体の人間を下に見ている。

隊員 カナ・エリザベート

出身： ミッドチルダ

所属： 時空管理局

階級： 三等空曹

役職： 捜査官

コールサイン： RABE (ラーベ)

魔法術式： ミッドチルダ式・空戦AAランク

ポジション： センターガード

姉と同じく才女。礼儀正しいが、やはり傲慢で姉の言動を丁寧語に直しただけである。

射撃に特化しており、百発百中。

ステラと叫びたい

魔王は強かった。^敵

確かに魔の王と言うだけの事はあった。

魔王の命に届く刃を持つていながらも、その強大な魔力の前に阻まれ勇者とその仲間はその身を地に伏せる。

それでも勇者は——彼の目は死んでいない。

寧ろ、その中にある熱情はおおきくなるばかりだ。それもそうだろう。何故なら、彼が一番望んでいた状況がここに、奇跡に整ってしまった。

敵は強大。

惜しくも、後一步の所で届かない。

増援も来ない。

苦楽を共にした頼れる仲間も動けずにいる。

しかし、その後ろには守るべき王都^{人達}がある。

ここに召喚されてから右も左も分からない自分を最^人盾してくれた宿屋の主人。

強面で多くは語らないが、誰よりも装備の大切さを教えてくれた加治屋のおっちゃん。

いつも、エールをおまけしてくれる酒場の女将さんや、その娘さんの笑顔に癒され、馬鹿笑いをしながらも楽しげに話す冒険者^{戦友}の姿。

色んな人が支えてくれた。こんな若造が世界を救ってくれると信じて尽くしてくれた。助けてくれた。

なら、それに応えないといけない。

それに、見合う働きをしないといけない。

その重みを背負って立ち向かわなくてはいけない。

こんな情けない姿をみせるわけにはいかない。

皆に明日を生きる勇気を与えないといけない。

「——それが、勇者つてもんだらうがッ……!!」

聖剣を杖代わりに立ち上がる。膝が震え今にも倒れそうになる。誰が見ても満身創痍だ。

それでも、その背中はとても大きく、そしてやり遂げてくれると信じられる力強いものだった。

「まだ足掻くか、下等生物ごときが…… 無駄なことを」

魔王が手を振るう。それだけで竜巻が起き全て吹き飛ばす災害が勇者の身を吹き飛ばす。

「ッ!? アーラシユ!!」

その吹き飛ばされた勇者の…… アーラシユを屈強な身体を持つ仲間、ガロウがボロボロの身体で受け止め——きれず一緒に地面に転がってしまう。

「——ッ、大丈夫か?」

二人して地面に仰向けに転がりながらもガロウは首だけでも持ち上げてアーラシユの方を見た。

鎧なんてとつくの前にボロボロになって、先ほどの攻撃によってアーラシユの命を守っていた鎧は遠くの方に転がっていた。

「ッッ!?!」

その鎧の下に着込んでいた薄い革鎧もボロボロで至るところから血が滲んでいた。

こんなにもボロボロで……。

ガロウはふと自分の身体を見る。確かに普通なら重症だ。だが、アーラシユはどうだ? これより更に重症でありながらも立ち上がり魔王に立ち向かった。

それに対して自分はどうだ? まだまだ動く身体を勝てないとの理由で動けなくした。

立ち向かうの諦めた。

何が勇者の右腕だ。

何が剣聖だ。

何が戦士だ。

戦うことを放棄したヤツが剣を持つ資格は無い。

剣を離れたヤツが身を守る鎧なんて着る必要は無い。

勇者の横相棒に立つことが出来ないヤツこの場にいる資格は無い。

ガロウは悔しさに奥歯を噛み締める。そして、慣れた手つきで防具を外し放り投げる。

「俺は臆病者だ！ 勝てねエと分かった瞬間、身体が動かなくなった！ 俺がこんなもの着けてても意味がねエ!! 少しでもお前を守れるってんなら…… 少しでも役に立つなら俺がお前の鎧になってやるツ!! 一撃、いやお前がヤツを倒すまで耐えてやるツ! …… すまねエ、俺に出来ることはこれしかねえんだ」

腕で顔を多いアーラシユに見えないように隠す。だが、アーラシユは気がついてるだろう。自分が情けなく涙を流しているのを。

それでも、ガロウは隠さずにいられなかった。

しかし、一向にアーラシユは返事が無い。黙っているだけだった。その沈黙にガロウが手を震わせながら拳を握る。

何も言わないアーラシユに対して、ガロウは失望されたと感じ取った。

それもそうだ。 臆病風に吹かれたヤツなんて鎧の代わりにも、それこそ、盾のにすら役に立たないだろう。

が、しかし、聞こえてきたのは押し殺した笑い声だった。

「…… 何が面白いんだよ」

「いや、最初とは逆だなんて」

ガロウはそこで思い出す。まだ、二人でしか旅をしてなく、お互い弱かった時の話だ。

『クソツッ！ このままじゃあ二人してヤロウの腹の中だ!』

ある依頼で魔獣の討伐を受けたのはいいが、思ったより魔獣が強く、追い詰められた時だった。二人して泥だらけで木の幹を背に腰を下ろす。少なくとも血を流しており、そう長くは移動出来ない。

それにきつと匂いで嗅ぎ付けられるだらう。

『…… ガロウ、あの魔獣の隙を作る。そのお前の剣で痛手を負わせ

れるか?』

『隙を作るつたつて…… どうするつもりだよ?』

魔獣は決して小さくない。寧ろ、人を丸のみ出来るぐらいの大きさを誇ってるくらいだ。

しかも、その図体に似合わず中々素早いのだ。故に、二人は翻弄され決定的な一撃を与えずにこの状況まで追い詰められている。

そこでアラーシユはならば、と提案した。

『俺がアイツの攻撃を受け止める。多分、一度しか成功しないから…… 後は頼むぜ? 相棒!』

『アラーシユ、お前…… 折れた剣でどうするつもりかは知らねえが、信じていいんだな?』

それに対してアラーシユは愚問だ、というように近くまで来ていた魔獣の前に飛び出したのだった。

「…… バカいつてんじやねえよ。状況が違い過ぎるだろうが…… 俺がヤツの攻撃を反らす。ヤロウの魔法の速度にも慣れてきた所だ——行けるよな? 相棒」

斯くしてあの時は逆。そのことにアラーシユは立ち上がって聖剣を構えることで、答えてを示して見せた。

「アラーシユ! ガロウ!」

「アラーシユ様!」

そこに二人の仲間が駆け寄って来た。

炎を思わせるような紅い髪をサイドに纏めて、真紅の槍を携える少女。

少し幼さを残しながらも女性としての魅力が垣間見え始めている彼女——ミランダが肩を上下させながらもアラーシユに近寄り、目尻に涙を溜めながらアラーシユを睨み付ける。

「もうっ! バカアラーシユ!! 心配したんだから!」

そして、その首に腕を回しアラーシユを抱き締めた。それはもう離れたくないと言っているように強く優しい抱擁だった。

その後ろに、急いで来たにも関わらず息切れしていない鬼——聖女

リリエルが満面の笑みでアラーシユを見ていた。

ウエーブのかかった美しいプラチナブロンドの髪が心なしか逆立っているようにも見える。いや、きつと見間違いだらう。

しかし、何故か悪寒を感じるのでそつとミランダの抱擁をほどいて

「——ちよつ、ミランダ、痛ツ！ き、傷にさ、触ってる……ッ！」
「あつ、え、ご、ごめんなさい」

少し頬を染め名残惜しいそうに離れるミランダ。それを見ていたリリエルの笑みが更に深くなり悪寒も強くなったような気がする。

「何やってんだよ、世界の命運を分ける大事な戦いの最中だつて言うのよ…… 敵さんは準備万全のようだぜ」

ガロウが睨む方向を見れば、魔王が悠然とした態度でこちらに歩いてくる。周りに数十もの火球を浮かせながら。

「随分と余裕だな、勇者よ…… いや、道化^{偽物}よ」

「ツツ!? 何故、魔王アナタがそれを!？」

それに反応したのはアラーシユでは無く、聖女リリエルだった。それも、そうだろう。

彼女はアラーシユを——■■■■を呼んだ本人であり、守るべき王都の第一王女でもあるのだから。

しかし、その言葉は他の二人には衝撃的過ぎた。故に、言葉もでらず固まる。

「フンツ、勇者と魔王は一对にして唯一無二の存在だ。何故、聖剣を握れているのかは知らんが…… それが本来の力を——貴様らが扱う聖術が使えているのならこの身は切り裂かれていただらう。忌々しいことにな」

その言葉が本当ならアラーシユは勇者では無いということになる。なら本当の勇者はどこにいるというのだろうか？

いや、そんな事はどうでもいい。否定もしないリリエルとアラーシユにミランダは突っ掛かる。

「どいづいことよ……? アラーシユ、貴方は勇者じゃなかったつてことよ。」

それに対して当の本人は苦笑い浮かべるだけだった。

「悪い、黙ってるつもりはなかったんだが……まあ、結局黙ってたことになるか。だが、ちゃんと勇者はいるから安心してくれ」
違う、そうじゃない。そんな事を聞きたいんじゃない。

「——なら、何で勇者でも無いアンタが勇者なんてしてるのよッ!!」

こんなボロボロになって、幾度も死にかけて、時には心無い罵声を浴びせられ、それでも何故、自分が傷つくことに何も抵抗が無いのか。

その答えはただ一つ。

涙を流すミランダの頭を撫でながら彼は言う。

——大英雄憧れる人になりたかったからだ。

「ごめんなさい、私のせいで貴方には辛い重みを背負わせてしまつて……それでも、私は貴方を勇者だと言わせてください——」

——『勇者アーラシュ』と」

リリエルは胸の前で手を握る。その顔には強い罪悪感が出ていたがそれ以上にアーラシュを信じていた。彼なら……おとぎ話のように現れた愛白馬の王子様しき人なら魔王を倒してくれるだろうと。

「そう……そうね。私なにいつてるんだろう。アーラシュは勇者よ、紛れもなく勇者様よ！ みんなに勇気を与えて、今もこうしてみんなを救おうとしている！ アンタを勇者と呼ばない人なんてこの世界にはいないわ！」

涙を拭いいつも通り勇ましい笑顔を、花のように可愛らしく、そして、皆を明るくさせる太陽のような笑顔を浮かべるミランダ。

「ハッ！ この際、勇者だろうが、勇者じゃなかろうがどうだっていい

ぜ！ 皆を救うんだろ？ 目の前のヤロウをブツ倒して、さっさと帰ろうぜ！」

前を向き、口元を吊り上げて剣を構える様は正に剣聖、いや、剣鬼。その目にはもう怯えは無い。今のガロウなら全てを切り裂く気迫が感じられる。

そんな彼らを見て、この後のやろうとしている事を思うととても悲しくなった。

しかし、それでも勇者でも無い自分が魔王に一矢報いるなら正しくこの一矢しかないだろう。

身はボロボロでも心は死なず。

魔王は悟る。確かに勇者では無い彼らが自分の身を脅かす存在では無いことは分かっている。

しかし、この言い様の無い不気味な感じは何だろうか。

頭を振る。何を自分は恐れているのだろう。

この火球を打ち出せば奴らは耐えられる筈がない。例え、耐えたとしてもただ切れ味の良い剣と成り下がった聖剣の何が出来るといいうのだ。

そう、恐れる必要は全く無い。寧ろ、防御に回している魔力も攻撃に回してしまおう。

それに伴い、肥大化する火球。まさに、絶対絶命の状況だった。

「終わりだ」

魔王が手を振り下ろす。そして、四人を中心にして無数の火球、否、小さな太陽と化した魔力の塊が四人に襲いかかった。

耳を思わず塞ぐような爆発音に、王都にも届かんばかりの圧縮された熱風が起きる。

その光景を見た魔王は勝利を確信させる。これで背後に忍ばせていた軍は必要無いだろうと思っていた。

王都も静まり返っていた。リアルタイムで映し出されていた映像で勇者達が死んだのだ。

寧ろ、パニックが起きなかっただけでも奇跡とも言えた。

そう、人々にとつて奇跡が起きた。王都から歓声が上がる――
――ことは無かった。

煙が晴れた所から現れたのは五体満足な勇者一行。しかし、その肝心の勇者は身体中から血を吹き出して、今にも死にそうであった。

他の三人も至るに火傷を負っており膝をくっしていた。

これじゃあ、勝てるわけが無い。誰もがそう思っていた。

だが、違う。

彼だけは、アール^英ラシユ^雄だけは勝利を確信した。

「この、時を……待ってたぜ、アンタがその防御を解くその時を、な」

「……そうか、確かに今の私なら切れるかもしれんが――」

――この軍勢を相手にしてなお、生き残れたならの話だがな」

パチン、と魔王が指を鳴らせば背後から大きな黒い渦が現れ、そこからあらゆる種族の魔族たちが行軍してきた。

正に絶望という言葉しかない状況でも三人は立ち上がるうとした。

勇者が立っているのだ、自分達が立たなくてどうするのだ、と己を奮い立たせる……が、それを止めたの他でもないアールシユだった。

「おい？」

「え？」

「な、何をなさるつもりなのですか……？」

――もう、いい。

――そして、ゴメンな。

そう、言ったのを最後に金色の風がアールシユを中心に舞い上がる。
る。

そして、地面に聖剣を突き立てて一步前と踏み込んだ。

「バ、バカなの!? 何故、何故、貴様がこれほどの魔力をツ!？」

それは人では持つことがあり得ない魔力の渦であり、それがアールシユを中心に高まっているのだ。

「ああ、お前の言う通り俺は道化なんだろうぜ……だがな、道化は道化でも道化、つまり切り札の方だ。でもって、その身に刻め——

——『英雄アーラシユ』の名を！」

彼が願ったのは勇者何かじゃない。

願ったのは一人英雄の姿。

自分もあの英雄のようになりたいと。

だからこそ、この状況に、この奇跡に感謝した。

これで皆守ることが出来る。

これで皆を助けることが出来る。

そして、何よりこの世界に来てよかったと思えた。

「——陽のいと聖なる主よ

あらゆる叡智、尊厳、力をあたえたもう輝きの主よ

我が心を、我が考えを、我が成しうることをご照覧あれ

さあ、月と星を創りしものよ

我が行い、我が最期、我が成しうる聖なる献身を見よ

この渾身の一射を放ちし後に——

——我が強靱の五体、即座に碎け散るであろう！」

金色の魔力の暴風はアールシユの腕に収束され希望の一矢になる。
その輝きは人々に祝福をもたらす光——

「――流星^ス一条^テアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!」

希望の光がこの世界に落ちた瞬間だった。

執事

紅魔館にて。

その住人が全員ある一室に集合していた。こじんまりとした部屋、内装や家具など初期からほとんど変わらずに置いてある物ばかり。

しかし、その部屋は劣化どころか一切汚れなど見当たらない。その部屋の主人の性格がよく見受けられる。

一見、淋しくみえる部屋ではあるが、棚には妖精などから貰った輝く石や花。彼の仕える主人からの贈り物などよく見れば見るほど彼がいかに慕われていたかが分かる。

そして、彼。

長年、この紅魔館の主——スカーレット家に仕えて来た彼がまさに今、人生を終わらせようとしていた。

「——気分はいいかしら？」

レミリアはそっとベットの縁に腰掛ける。自身に絶対の忠誠を誓い、ずっと仕えてきた彼の頬を壊れ物を扱うように触れる。

昔に比べて皺も増えた。

歳を重ねるたびに彼はどんどん衰えていった。

あの夜の空を思わせる黒い髪も何時しか白髪となった。

——ああ、何と人はこんなにも早いのだろうか。

レミリアはそう人に興味があるわけでは無い。どちらかと言えば脆く弱く、集団を作らなければ生きていけない種族で我々、吸血鬼の餌かまたは家畜に過ぎない……… という考えを今でも持っている。

しかし、それは多くの人間であって、レミリアの知っている人間には全く違う観点から見ている。その能力故にレミリアは色んなものを見て来た。

そして、レミリアはいずれは訪れるであろう最悪の運命を受け入れ

ようとしている。

「本当に貴方は吸血鬼になるつもりはないのね？」

ベットに横たわる彼はゆっくりと首を横に振る。もう視力も聴力も殆ど衰えいているというのに彼は分かっているのだ。それほど、長い時間一緒に歩んで来たのだから。

「そう……人は永遠の命を欲すると良く聞いわ。吸血鬼は決して永遠の命なんてものではないけど、人なんかよりも長くて、若くて、力を持って……そう、人が望むものは大抵のものは手に入るハズよ」だが、彼は決して吸血鬼にはなろうとしなかった。

レミリアは衰えていく度に再三『吸血鬼にはならないか』と彼に提案してきたが、彼は肯定しなかった。

——人とは老いすらも楽しんでるのです、お嬢様。

人が人であるが故に。

だからこそ、彼女は命令はしなかった。人として生まれたのだから人として終わるのが理想だと。彼女なりの考えもありこの日までずっと命令で吸血鬼になれと、人を捨てろと言わなかった。

そう、この日まで。

「なら、人としてでは無く。私——私達の為に生きろ!! もう十分、人として生きてたでしょう!! もう一度、私達に尽くしなさい! もう一度、あの夜の時のように忠誠を誓いなさい! これは、命令よ!!」

涙を流し彼女は言う。しかし、彼は首を縦に振らなかった。仕えて初めて彼は主人に逆らったのだ。そして、ただ、一言。

——私のこの日を待っていたのですから。

その顔はとても安らいでいて昔から変わらない極めて穏やかな笑みを浮かべていた。

それに堪らず彼女は牙を?き出しにして、その首に噛みつこうとする……が。

「——ダメです! それだけは絶対にッ!」

その牙は首に届かない所で閉じられる。後ろからレミリアを門番

である美鈴が羽交い絞めして止めたのだ。そして、その前には彼の後継者である咲夜が両手を広げて立ち塞がる。

「お願いします、お嬢様……どうか、どうかそれだけは」

彼の最初で最後の願いだけは。

「っ、うつ、くうつ……」

「ウォルター……」

「…… お疲れ様。ウォルター」

「後はお任せください……」

皆、涙を流す。

そして、ついにその時がやって来たように彼はニヤリと笑みを溢した。

「えっ」

それは、誰の声だったのだろうか。しかし、全員が悲しみから驚愕や混乱に変わる。先ほどまで白髪であった髪はあの日のように黒髪に戻り、顔も皺が無くなっていく。

それは正に若返っている、という現象が彼の身体には起こっていた。

そして、ベットから起き上がるのはかつての姿。

彼にとって全盛期とも言える姿であり、彼女たちにとっては久しく見る姿。

咲夜にとっては父、または兄のような思っていた彼が昔の姿を取り戻していく姿は口を開けて唾然する他無い。

みんなが一樣に唾然とする中、彼は髪をかき上げ後ろに結う。黒のカッターシャツにネクタイを締め片眼鏡を掛ければ何時もの彼があった。

ただただ、言えることは今日の前にいるのはあのウォルターである

こと。しかし、こうして若返ったことに驚きもすれば喜ばしいことであることは変わらないはずであるのに、誰も近づこうとはしなかった。

否、誰も近づけなかった。

黒。服装も合間つてその全容は真つ黒だ。ただ、その射殺さんばかりの鋭い目は今まで初めて見る。本当にあのウォルターとは思えなかったのだ。

「ウォ、ウォルター？ 貴方一体……？」

困惑としながらも喜色を孕んだ声で声をかける。しかし、ウォルターはそんなことを無視するかのように、今まで吸った所など見たこの無い煙草を慣れた仕草で口に啜えた。

「ゴミです。人は死ねばゴミとなる。そして、そのゴミに忠誠など一切ない。つまりこういうことだレミリア」

煙草に火を付け全員を見据える。

「私は誰の命を受けずここに立っている。私は私として立っている。ウォルター・C・ドルネーズとして立っている。私は私の殺意を持ってこの夜明け貴方を切断しようと思う」

初めて知ったフルネーム。いや、そんなことはどうだっていい。

「な、何故!? ウォルター、一体なにを言っているの!？」

すると彼はクツクツ、と押し殺すように笑う。

「反逆だ、反逆だよ。私はスカーレット家に仕える前には化物狩りを生業としていた。しかし、誰も私を止めることなどできはしなかった。全盛期を迎える前にこのざままでは話にならない。故に、私は待った。全力で戦える相手を待った。吸血鬼として十分な力を持っているスカーレット家であればきつといずれか現れるだろうと私は待っていた」

——そして、その日がついに来た。

「この地、この場所で、私は宣戦布告しよう。夜明けとともに切断しようかと思っただが如何せん、情が移りすぎた故に今のままでは十分に力

が振るえないだろうお前たちは？ 何、別に吸血鬼と言わずこの地に存在する全員を相手に私は戦う」

待っていたのだから。この日を待っていたのだから。

「私にこの力をくれたヤツの言葉を借りるなら——」

——さあ、戦争をしよう。